

# 日本のポンペイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

No.14

## 『尾崎喜左雄氏の古墳時代研究と渋川(3)』

前回は、榛名山の噴火軽石層にすっぱり埋もれた伊熊・有瀬1号・有瀬2号墳の尾崎氏の調査を紹介しました。一方で、この厚く積もった軽石層の上に造られた古墳に対しても、尾崎氏は大きな関心を持ちました。というのは、軽石層の上と下では、間違いなく上の古墳の方が新しいからです。この事実をもとにして、軽石層下の古墳と軽石層上の古墳の構造や内容を比較すれば、古墳がどのように変化していったのかを明確にできるわけです。他の地域では見られない渋川の古墳の強みです。尾崎氏は、この点に大いに注目したわけです。

今回紹介する虚空蔵塚古墳は、軽石層の上に造られた古墳です。場所は、市中心部から通称日陰道ひかげみちを北へしばらく進み、北西角に国土交通省事務所のある信号を左折して、伊香保温泉方面に少し向かった右側にあります。たどり着くと横穴式石室の入口部分がすぐ目に入ってきます。保存のためフェンス扉で閉じられていますが、中を十分覗ぞけますので、石室の中の様子がよく分かります。石室が小さいこと、驚くほど見事な石材加工を施した石が使われていることが特徴です。この特徴は最後の段階である古墳終末期・7世紀後半に属することを示しています。しかも、これほど丁寧で、精巧に造られたものは、地域の最有力者に限られるものです。もう一つ、この古墳が教えてくれることとして、榛名山噴火から100年後には、地域の人々の努力により、ほぼ復興していたことが分かります。



虚空蔵塚古墳の石室内部

(群馬県立歴史博物館 特別館長 右島 和夫)